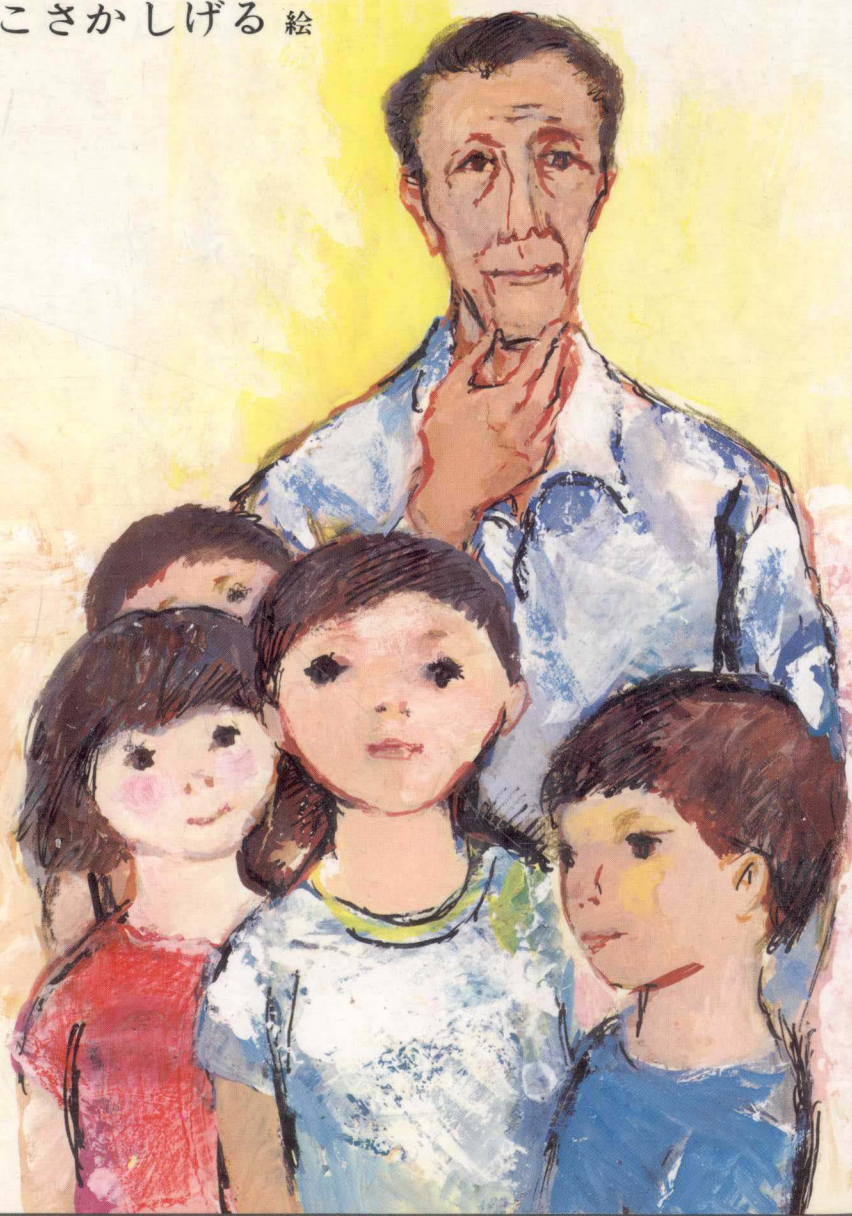


ふんどし校長

川村たかし 作

こさかしげる 絵





偕成社のAシリーズ 5

ふ ん ど し 校 長

NDC 913 偕成社 182p. 22cm 1981年

発行 1981年4月 初版第1刷

著 者 ^{かわ}川 ^{むら}村 た か し

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

印 刷 新興印刷製本株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-525050-3

Printed in Japan ©川村たかし こさかしげる 1981

〈改装版〉

ふんどし校長

川村たかし作
こさかしげる絵



●はじめに

だれだって、おくびょうだ。

だれだって、よわむしだ。

だが、人はだれだって

ちよつとずつかわっていく。

ときにはぐんぐんかわっていく。

かわりながら、大きくなる。



ふんどし校長／もくじ

1 校長室はどこかしら^{こうちやうしつ}

2 いじわる歓迎会^{かんげいかい}

21

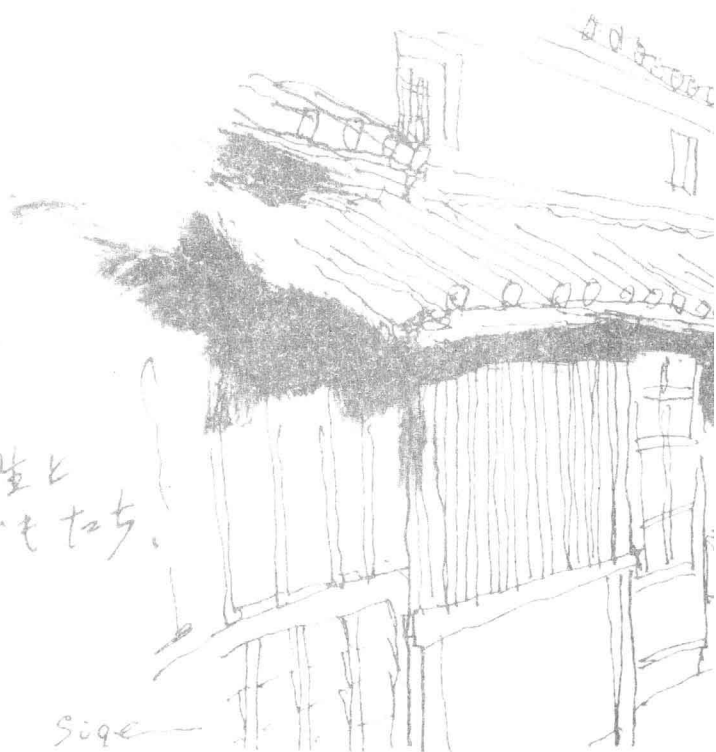
8



クジラとりの男たち（あとがき）	180
13 熱いプール	166
12 負けてもともと	154
11 死んだまね	143
10 カエルのまぬけづら	131
9 赤いカーテン	117
8 わざくらべ	101
7 かなづち組	87
6 しくじり	75
5 トレパンのよこれ	58
4 五年生遠足隊	45
3 泣かしてやる	33

校長先生と
子どもたち。

Sige





作者・川村 たかし（かわむら たかし）

1931年, 奈良県に生まれる。奈良教育大学卒。
日本児童文学者協会・日本児童文芸家協会会員。
主な作品には『川にたつ城』『山へいく牛』
（国際アンデルセン賞優良作品賞・野間児童文
芸賞）『北へ行く旅人たち』『広野の旅人たち』
『石狩に立つ虹』（路傍の石文学賞）『昼と夜の
あいだ』。住所／奈良県五条市新町2-1-14

画家・こさか しげる（小坂 茂）

1925年, 東京に生まれる。日本美術家連盟会
員, 春陽会会員, 童美連会員。絵本・さし絵
で活躍のほか, 個展・グループ展にも活発な
創作を続けている。72年, 第21回小学館絵画
賞を受賞。最近の児童図書には『二日間の夏』
『風のむこうに』『いのちの灯』『歌よ川をわた
れ』。住所／東京都杉並区下井草3-11-13

ふんどし校長

川村
たかし



1 校長室はどこかしら

運動場へはいる。こつちが近道らしい。右手にふるい校舎が見えている。ふと気がつく、すみっこにひとりのおじさんがしゃがんでいた。

ランニングシャツにトレパン。よごれたタオルをこしにぶらさげた、おそろしく顔のながいおじさんが、板きれをひねくりまわしていた。

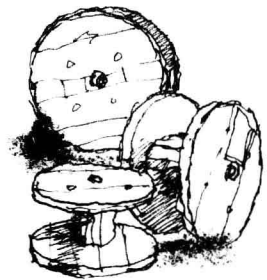
「あいう。」

おかあさんがよこ顔をのぞきこんだ。

「ちょっとうかがいますが。」

「はいよ。」

おじさんはむこうをむいたままこたえた。



「校長室はどこかしら。」

「あっちだよ。ずうっと行って、げんかんのとなり。」

おじさんはのこぎりを、にぎりなおした。

「なにかご用ですか。」

「転校してきましたのよ。」

おかあさんはさぐるようにあたりを見まわしながら、つづけた。

「でもまあ、ずいぶんときたない学校ですわねえ。」

おじさんは、はじめてゆっくりとふりかえった。おかあさんと達也^{たつや}を見くらべて、ほんのすこしわらった。

「きたなくはありませんぞ。そうじはゆきとどいている。ただ、ちょっとふるいだけですわい。」

おかあさんは、けたたましくわらった。

「そうね。それはそうだわ。ところで、あなたはなにをしてなさるの。」

返事^{へんじ}はなかった。たしかに、おじさんはへんなものをいじっていた。ひと口に言えば、

糸まきだった。それが、ひどくでかい。大きいものはおとなの背^せたけよりも、まだ高い。大小さまざまの糸まきが、二十ちかくもごろごろとところがつている。

そのなかのひとつを、おじさんは修理^{しゅうり}していた。達也^{たつや}はおかあさんを見あげた。

「なんにつかうんだろ、これ。きいてよ。」

おじさんは糸まきのしんぼうのところを、がんがんうちつけていた。が、その手をふととめた。ふりむいて、いくらか茶色^{ちやいろ}い目で、びたつとこつちを見た。

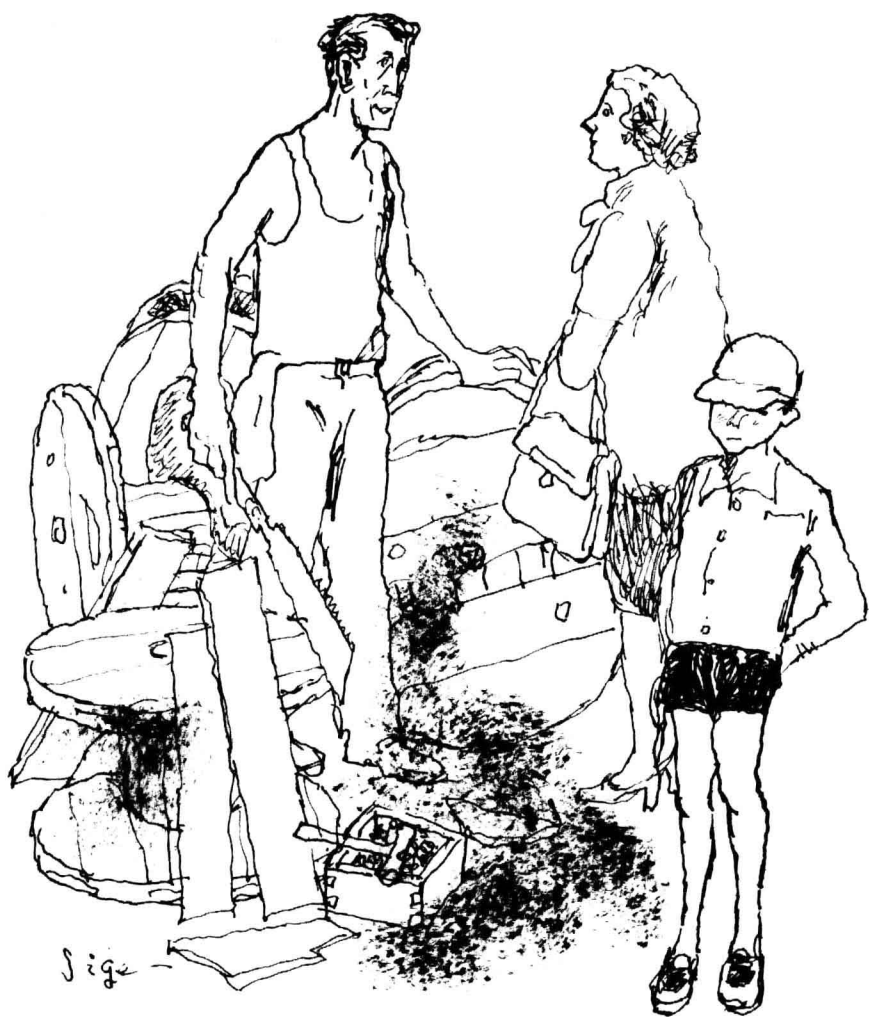
「じぶんでたずねるがいい。」

達也^{たつや}はもじもじした。おじさんの茶色い目が、まっすぐな光線^{こうせん}になって、心のなかまでぐいとびてきている。ほったが、かっ^{あつ}と熱い。

おかあさんといるときは、いつもこうだった。達也^{たつや}はかげにかくれていた。おかあさんがなにもかもうまいぐあいにやってくれる。おじさんはそのかくれみのを、だしぬけにぱつとひっぱがしてしまった。

おじさんはつづけた。べつにおこっているふうでもなかったが、

「五年生にもなれば、いちいちおかあさんの顔を見ることもないさ。わからなければ、



じぶんできく。」

達也^{たちや}はおもわず「はい」と、こたえた。

おかあさんのほうは、むうっとしていた。

「なんです。あなたに説教^{せつきょう}されることはありません。おいで、達也^{たちや}。」

手をさしのべたが、かれは気づかないふりをした。いくらなんでも、こればかりははずかしい。五年っ子はもう、おかあさんにつかまらなくても歩ける。おかあさんはふと足をとめた。

「ちよつと——」

声はおじさんの背^せなかをつきさすようにとんで、

「ちよつと、あなた。」

「はいよ。」

「校長先生^{こうちやうしやう}はいらっしゃるんでしょね。」

「さあ、どうだろう。たぶんいるとおもうがねえ。」

なんというぶれいな——。おかあさんは魚^{さかな}のように口をとがらせて、身^みぶるいした。

それから、ぐんぐん歩きだした。大きなおしりをふりふり、まっしぐらに運動場をつつきっていく。達也はちょこちょこ走りになった。

（だが、どうして五年生と知っていたのだろう。それに、糸まきをなんにつかうかも、こたえてもらわなかった。）

気になってふりかえると、おじさんは修理した大きな糸まきを、ごろごろところがしっていくところだった。

馬づらのおじさんが、校長先生の越智俊一郎だとわかったのは、それから五分とたたないうちだった。

おかあさんは赤くなり青くなって、そこそこににげてかえった。かえってからも、一日じゅうきげんがわるかったのも、やむをえない。達也はきょうだけはおかあさんに、同情した。校長先生も人がわるい。

その夜――。

おとうさんがとちめられることになった。もうすこし、ちゃんとした小学校はないのか、とおかあさんはいった。

「校舎はおんぼろだし、校長先生ときたらなまいきだし。」

「なまいきだって。」

おとうさんはけわしい顔をした。

「どういふことだね。なまいきなのは、おまえさんのほうじゃないのかい。」

「なまいきというのはよくなかったわ。いじわるなのよ。担任の大矢先生は若いけれども、なかなかのおじょうさんとみたわ。てきはきしたとても感じのいいかた。それなのに、校長先生ときたら——」

いじめた、という。このショック、はずかしさはたいへんなものだ、おかあさんはいきまいた。

「これじゃ、授業参観にもいけやしない。」

おとうさんはうでぐみをして、きいていた。それから、だしぬけに大きなあくびをした。

のぞいていた達也と、中学生の節代は顔を見あわせた。やれやれ、これでまもなくあらしはやむ。台風はやがて、げんなりとよわって、低気圧にかわることだろう。おとう

さんのあくびはそのまえぶれというものだ。

おもったとおり、おかあさんは大きなため息をついた。かたをおとすと、首がめりこんだみたいに見えた。

銀行につとめているおとうさんが、きゆうに転勤になった。もとの家からかようとすれば、片道で二時間半もかかる。次長というたいせつな役目は、かえりがおそくなることとおおい。家族ぐるみのひっこしということになって、五月もおわりになってから、一家はこの町はずれの社宅にひっこしてきたのだった。

「学校をかわるわけにはいかないものかしらねえ。」

おかあさんの低気圧はまだつづいていた。

「どうにもならないさ。転校するというのなら、もういちどひっこしだ。」

「しましうよ。ものいりだって、しかたがないでしょう。教育条件がわるいんだから。この町にだって、ほかに五つも小学校があるというじゃないの。よりによって、こんな——」

「ところが、そいつがわるくない。」